

獸首鏡に就いて

梅原末治

支那の古鏡に獸首鏡と呼ぶるゝ一形式がある。

鏡背文様の表現が平面的で、内區は鈕から四出した一種の絲卷形の區劃に依つて四分され、各に一箇宛の獸首を配した特殊の構圖を示したものである。此の形式の鏡は本邦の古墳からは未だ發見されないが、支那の出土品には往々其例があり、特に其の一に熹平三年の紀年を表はした遺品が存して、學者の注意を惹いて、それが後漢代に行はれた一形式であることが分明した。然し一方から云ふと熹平三年は此の種鏡の存した一點には相違ないが、該形式の永續の年代如何に就いては何等

示す處がない。從來の考察は其の遺品が多く相似た手法を表はしてゐる處から、熹平を中心として一時行はれた型式と見る風に傾いた事ではあるが他方同じ平面的の手法を示してゐる夔鳳鏡が漢から六朝に互つて行はれた例證あるに於いて、安んじて其の見解に依ることは私の踟躕した處、これを確める機會の到達を望んだ次第であつた。處が最近偶然の事から獸首鏡の著しい二個の遺品の存在を知り、而かもそれが共に紀年を存して、如上の疑點に幾分の解釋を與へ、形式永續の年次を或程度まで推すの幸を得た。依つて先づ右の資料を舉げて廣く學界に紹介し併せてこれに關聯した鄙見を附記することにする。

〔註〕(一)此の鏡は劉心源の「奇觚室金吉文述」に著録されて學界に紹介せられた。原品は羅振玉氏に依れば襄陽の錢氏の所藏である云ふ。

(二)富岡謙藏氏遺稿「古鏡の研究」所收(三)支那

古鏡圖說の漢獸首鏡

の條其他參照。

二

さて新たに獲た獸首鏡の資料と云ふのは一は内藤先生に依り知ることが出來た

京都守屋孝藏氏所藏の延熹

九年鏡で、他は文學士河鏑

實英君の示された東京中村不折氏收藏の甘露五年の鏡である。先づ前者から其の記載を試みやう。

延熹九年獸首鏡。此の鏡は徑四寸七分五厘、縁

厚さ一分餘の薄手の鏡で、面には稍著しい反りがある(一分五厘餘)。精良なる白銅質で、處々になほ白光と黒漆色とを遺存するが、全體は綠鏽を以て覆はれてゐる。此の鏽の鮮かな處から推すと蓋し出土して餘り年時を経ないものであらう。

二片に碎けたのを接合して今ま全き形をしてゐる。

鏡背の圖様は第一圖の拓本に示すが如く、中央に徑七分、高さ三分位の完好な圓座鈕があり内區の圖様以下此の種鏡の通用の式を示して、文様の明かな鏽の少い部分に就いて見ると表現

の手法は銳利である。今ま少しく細部に互つて觀察するに、絲卷形に近い圖形の中にある銘は宜高の二字だけ明であるが他の二字は官君で、全文は



第一圖 延熹九年獸首鏡拓影

君宜高官とあつたのであらうし、外區を形成するのは一種の變形鳥獸紋唐草帶と其の内側に置いた渦紋を添へた半圓弧帶との二者で、此の兩帶から成ることは熹平三年鏡と同軌であるが、半圓弧の數の

二十六個なのは違ふが上、

其の異様の唐草樣帶は桑名

鐵城翁珍藏の獸鈕獸首鏡(一)

と全然同一型に屬し熹平鏡

の菱形紋帶とは相違してゐ

る。内外區の間にある銘帶

は右文でかなりの長い銘を

刻してあるが磨滅や、接合

の際の加工の爲處々朦朧と

して解讀し難い。今ま明な文字は

延熹九年正月丙午日作竟。自有□□……………□□

長命宜孫子。□□……………□吉兮



第二圖 甘露五年獸首鏡拓影

の二十字で、内「年」「午」「命」の三字は左字である但し紀年の部分の最も明瞭なるは嬉しい。銘の書體は上記桑名氏の一鏡と極めて近似してゐるとか

ら推すと、自有の以下は紀除

去非祥と續き、また長命の上

は大富でもあらうか。こゝ

に見ゆる紀年の延熹は後漢の

桓帝の立てられた處のもので

西紀一五八年から一六七年ま

で續き、同年永康と改元され

た唯一つのもの、其の九年は

西紀一六六年に當る。従つて

此の鏡は當時の鑄造で、從來

知られた熹平三年鏡に先立つ

八年前の遺品なることが明かである。

甘露五年獸首鏡、次の甘露鏡は河緒文學士に依

ると大さ略前者に相似て、其の鏡面の反りの大な

ることまた一致してゐると云ふ。構圖は第二圖にこれを示したが、大體に於いて熹平鏡のそれと同じ式で、たゞ鈕の下方に渦紋の様な沈彫の見え、また珠紋が繞らされ、絲卷形圖形が形式化されて中の銘に代ふるに正面の獸首を以てしたこと等を著しい相違とする。而して鬪様全體に於いてそれが著しく形式化して表現に生氣を缺いた事も眼につく。銘文は左行二十九字で次の如く釋讀し得る。

甘露五年二月四日。右尙方師作竟。清且明。

君宜高官。位至三公。長宜子孫。

左文であるが「位」の一字のみが右に書かれてある文中甘露なる紀年と右尙方師作竟とある二者が注意すべき句でそれは前者が鑄造の年代を示してゐる爲、また後者は製作された處を表はした故である。

甘露なる紀年は前漢の宣帝(西紀前五三—四九)魏の廢帝のそれ(西紀二五六—二六〇)及び吳の末

にこれを見る。従つて其の何れに當つべきかは一寸不明であるが、第一に吳の甘露は僅かに一年で寶鼎と改元されたから甘露五年とある此の鏡は勢ひ前漢か魏かであらねばならぬ。而して上に舉げた鏡の示す手法を延熹熹平の二鏡に對して著しく形式化せる事實と、種々の點から歸納した一般支那古鏡鑑沿革大系の上から見て前漢の中頃にこの如き鏡の存したとするのは不穩當であるから、これを魏代のそれ即ち西曆二六〇年に當つべきものと考へる。この事は次の右尙方師なる句の解釋からも傍證される。

尙方が漢の帝室の調度品を製作する司省の名稱であることは今更事新しく論ずるまでもなく、漢鏡中に尙方作の銘ある遺品の多いことまた學界周知の事實である。處が此の尙方の官司が關係の業務の發展と分業の必要からでもあらうか後分れて左右中の三尙方になつた。唐の杜佑の通典は此の

事を記し、

秦置尙方令漢因之、後漢掌上手工作御刀劍玩好器物及寶玉作器、漢末分尙方爲中左右三尙方魏晉因之、自過江左唯置一尙方。

として、此の分立を漢末にしてゐるのは注意に値する。尤も此の年代に就いてはこれよりも早く漢武帝の太初四年に造れる駘蕩宮の銅登の銘に少府の中尙方とあることから疑問があつて、漸次に分れ中尙方の如きは早くからあつたこととも思ふが右尙方なる語は前漢の金石文其他に所見がない様であるから、此の三派の分立は少くも後漢とする方が穩當であらう。(一)銘文中の右尙方師はまさに此の分れた右尙方の官工が作った事を示すもので三尙方中、鏡がこの尙方の手に出來た事が認められ、従つて支那の制度史の上にも若干の寄與となり得る。

〔註〕(一)此の鏡は現存の獸首鏡中最も優秀な遺品の一で

ある。富岡先生遺著「古鏡の研究」の圖版第十二に其寫眞が收められてゐる。

(二)なほ尙方の官工に就いては他日發表の豫定である。「尙方鏡考」に詳述する豫定である。

三

以上舉げた二資料の新出に依つて先づ我等の氣付いたのは從來單に熹平三年の一點のみの知られた獸首鏡の年代が、これに先立つ八年の延熹九年に存し、また同年から下ること約百年も後の魏の甘露五年にも同式鏡の作られてゐた事實を確め、少くも一世紀以上同じ式の鏡が行はれた事を知り得たことである。而して更に二資料の示す上舉の手法の考査から、其の延熹九年鏡が熹平鏡に比して同等若しくはそれ以上の整備な構圖手法を示せるに對して、甘露五年鏡の著しく形式化し生氣を缺いたものとなつてゐる事實を看過することが出

來ない、僅かに三個の偶然見出された遺品であるから、これに依つて直ちに動かない歸結を求むるの無理なのは云ふを須たないが、一形式が完備の域に達すると、それに新しいエレメントが入つてそれを改めて行かない限り、形の完備は漸次形式化となり廢類に至ること遺物が多くの場合取る進路である以上、獸首鏡と云ふ定まつた範疇の圖樣

の上に示された年代に依る如上の相違は、延熹、熹平の頃に整美した此式の鏡の文様が、百年以上も續く間に漸次型式化して、魏代に至つて甘露五年鏡に見るが如きものとなつたと解することは必ずしも附會の論とのみは云ひ得ないであらう。此の構圖の形式化のことは嚮に富岡先生が夔鳳鏡で認められた處と同一なのであるから、若しこれを認めらるゝとすれば同じ手法のものが同一方向を採つたことになる譯である。たゞ注意すべきは其の形式化の程度が夔鳳鏡の場合は六朝中期か末

期と思はるゝ遺品に至つて示されてゐるのが、獸首鏡に於ては甘露五年の遺品に既に相似たものゝ表はれてゐるの相違が、兩形式の行はれた時期の長さを暗示する處あるものと思ふ。私はこんな見地から延熹から甘露に至る百年間を以て獸首鏡が整美なものから形式化し、やがて廢滅に至るの過程であつたのではないかと考へる。

此の後半の問題に對して獸首鏡の起源如何及び其の完備に至る道程の考察は、今ま不幸にしてこれを究めるの資料を持たないが、然しそれが少くも後漢の中葉に斯くの如き整美した形を生じたに就いては、そのこゝに至る發展の徑路は當然豫想せられなければならないし、それが怪獸の頭部を主文様として且つ此の類に獸浮彫の鈕のあること等からすると、古銅器との間の關係が想察せらるゝ氣がする。度々論及した夔鳳鏡の主文様が古銅器に多い夔鳳を移したもので本鏡がそれと表現の

手法の同じことから推して此の推測は必ずしも理由のないことではあるまい。果して然らば支那古鏡としては構圖の古い流の一と云ひ得やう。たゞ今日ではこの推測の確かさを檢し得ないのを自ら憾みとする。

かくて獸首鏡の二遺品の新出は其の年代觀に一歩を進めたにとゞまるか、甘露五年鏡の存在は從來吳の鏡のみ多かつた三國の世に始めて北方の魏の、而も尙方の官工で作られた鏡を示された點で多少の興味があらうし、また以上の考察からして

從來年號鏡の取扱ひに對し、其の示す手法を以てやゝもすれば紀年を中心とする短き間に限り行はれたと見んとする傾の多い一部の考古學者に對して、從來短い間に行はれた特殊型の代表ともせられた獸首鏡に於いてすら、なほ此の如き形式の永續したのを明示することが出來れば、此の一小編は全く無意義ではあるまい。(八月廿七日稿)

〔註〕(一)富岡氏「古鏡の研究」三支那古鏡圖說の夔鳳の鏡條參照。